長崎大学教養部紀要（人文科学篇）第23巻　第1号　15－42　（1982年7月）

艾蕪覚え書 Ⅲ

中　田　喜　勝

A Note on "Ai Wu" (Ⅲ)

Yoshikatsu Nakata

ま え が き

艾蕪の初期作品の中に、"太原船上"と題する注目すべき短篇小説がある。1931年冬の作で、艾蕪がビルマから追放されて帰国し、上海に居を定めた時期の作品である。この短篇小説は魯迅から"樸実"であると評価され、後に艾蕪の出世作といわれる"人生哲学的一課"を書く原動力ともなったのであった。

しかし、この"太原船上"が筆者にとっては、暫らく"幻の作品"であった。「南行記」・「南行記続篇」など艾蕪の短篇集に見当らなかったのである。幸いにも1980年12月8日、成都の艾蕪先生から「艾蕪短篇小説選」(人民文学出版社・1978年・北京) が郵送されて来た。この中に"太原船上"が収められていたのである。

そこで、"太原船上"の写作経過・構想・背景などについて考え、かつ訳出して参考に供することにしたい。

1 "太原船上"の成立経過

"艾蕪短篇小説選"（人民文学出版社・1978年・北京）の重版題記の中で艾蕪は次のように述べている。

人民文学出版社編輯部から文化大革命以前に出版した"艾蕪選集"を再出版するという知らせがあった。私にとっては重大なことであり、「四人組」がまだ粉砕されていなかった時には全く思いもがけないことであった。この再出版の機会に四篇の小説を選んで入れた。その中の一篇に"太原船上"があるが、特に述べておきたいことがある。

私は1931年春、ビルマを統治していたイギリス帝国主義者に追放されて帰国したが、香港に着いてなお一晩、拘留されてから釈放された。1931年冬、私は沙汀同志と魯迅先生へ手紙を出し、題材に関する問題について教えを請うた。(魯迅先生の返事と私たちの手紙とはいずれも魯迅先生の“二心集”に収められている。) ご返信を受取った後で、また私たちが書いた小説を魯迅先生へ送って教えを請うた。私は書き終ったばかりの小説を送ったが、それが今日、集に選び入れた“太原船上”である。

当時、魯迅先生は私と沙汀宛の返信の中で、“太原船上”は素朴で、誠実に書かれていると言われた。それは私へ対して一つの大きな励ましであった。内容のせいで、出版物には登載し難く、私も仕方なくそのままにしていた。原稿は沙汀同志が保管していたが、1932年、上海の“一・二八事変”からの避難を経験し、また1933年、国民党の逮捕に遭ったが、(私は職工に会うために工場へ行ったが、彼らが捕えられたので、私もそこを探っていた探偵に捕えられてしまった。彼らは物的証拠がなかったので、釈放され、私も自由の身となった。) いずれの場合も原稿とは無関係で、遺失を免れた。このことは沙汀同志へ感謝せざるを得ない。

その後、沙汀はこの原稿をある出版社に渡して発表したそうである。不幸にも、この出版物は一回出してすぐに発行禁止に遭い、私自身も見ていなかった。1953年、私が鞍山に居た時、人民文学出版社編輯部から私自身が小説集を編集し作品を選ぶようにと求められた。“太原船上”のことも考えたが、捜し出すすべがなく、そのままに終ってしまった。鞍山から北京へ移り住んだが、いつの年であったか、上海で三十年代の文芸出版物を再印刷し、同時に全国文联ビルで展覧されたが、その中に、“太原船上”を載せた“文芸新地”があって、作者の署名は喬誠となっていた。これは沙汀同志がつけたペンネームである。私は蕾嘉同志に書き写していただいた。文化大革命中、「四人組」が文化面の大きな権力を窃み取り、ファシスト専政を進めたので、私は幾度か家を荒らされ家産を没収される破目に遭った。幸いにも、熱心なグループがこの小説をその他の原稿と一緒に保管していて、私に返してくださった。今、それを再び出版される小説の中に編入するわけである。これは魯迅先生への尊敬と記念とを表わすものである。……

上記の題記の一文によって、“太原船上”というこの短篇小説に艾蕪先生が、格別な思いを寄せられていたことがわかる。同時に、この小説が日の目を見るのに、迂余曲折のあったことも分かるし、魯迅から“朴実”と評された作品で

あったことも分かった。しかし、この小説はどのような意図で書かれたのか、構想はどのようになされたのかという点についても考えてみなければならないであろう。

そこで、先ずこの小説の“あらすじ”を示すと、次のようなものである。

厦門を過ぎ北上中の英国汽船“太原号”。船上は鈴なりの乗客、厦門から乗船し故郷へ帰る一人の兵士がいた。所属師団は解散又は他部隊に吸収されたが、共産軍討掃の戦歴があった。兵士もその戦闘に参加し、捕虜の経歴を持っていた。

兵士はやっと便所の近くに席をとったが、その臭みに閉口する。ただ乗船の後れを悔むだけである。甲板では場所を存分にとって、麻雀を楽しむ一団があった。兵士は場所のことで、その中の一人のデブとあわや喧嘩になろうとしたのを、周囲から制止される。そして、江西地区の“掃共”へ行く兵士たちと仲間になり、ゲリラ戦や福建西部のソビエット区について、得意気に物語る。

兵士に恨みを懐いていた麻雀仲間のデブがイギリス兵士の威力を借りて、兵士に報復する。兵士は二等船室にふんぞり返っているイギリス兵士のところに連れて行かれて、“ビンタ”をとられる。そこにはデブがいた。帰りながら兵士は罵声を発したが、その声は逆風に吹き消されてしまうのである。

つまり要約すると、貧富二種類の中国人がいて、金持ちは外国人と結託して貧乏人を苛める。貧乏人はどうしようもないが、不屈の反抗精神だけは持っているのだということなる。1930年代初期の中国に見られる重要な現象がこの短篇に集中的に反映されているのである。

2 “太原船上”の構想

艾蕪先生の筆者宛書信から、この構想の概略を知ることができる。書信を訳出し、併せてその原文を掲げる。

艾蕪先生からの書信

中田喜勝先生：

お便りによると、拙作「太原船上」というこの短篇小説を貴国の文字に翻訳なさる由、喜んで承知致します。またこの小説の状況と構想の由来とを私に書

いて欲しいとのことですが、随分、昔のことで、記憶も定かではないのですが、この小説は1931年の冬に書いたものです。材料は1931年の春に収集を始めました。私は1931年春にビルマを統治していたイギリス帝国主義によって、ラングーンから香港へ護送され、ペナン・シンガポールを経由しましたが、いずれも上陸は許されず、香港に到着してもやはり一晩中、拘留され、翌日、厦門へ追放されました。四月になって、私は上海に行きましたが、乗った船がイギリス太古汽船会社のもので、“太原号”という船名でした。私の小説の題名はつまりこの“太原号”から採ったものです。上海に到着しますと、上海にはイギリス租界・フランス租界があって、やはり帝国主義が所有している場所だということが分かりました。“太原船上”には帝国主義へ反対する意味も含まれていますし、私自身が体験したものもあります。これが第一点です。

第二点、私は厦門に到着して間もなく、春節すなわち旧歴の正月を過ごしましたが、友人の紹介で、同安県という田舎に行き、その村の小学校に住んだことがあります。小学校の先生が二十年代に上海で発行された新文芸の出版物を所蔵していました。例えば、“拓荒者”・“萌芽”・“ペルーの山”……。大部分は無産階級の革命を宣伝しているものでした。同時に、小学校の先生のところから、福建西部のソビエット区の新しい生活の状況、例えば、土地革命・男女平等の一連のすばらしい現象を耳にして、私は新しい中国が誕生していると感じ、大いに鼓舞されました。これらの精神は“太原船上”に表現されています。

第三点、当時のソビエット区ではゲリラ戦が行なわれており、捕虜を虐待せず、できるだけ教育して、離れて行く時には家へ帰る旅費まで与えているということを私は知りました。私は頭の中に後れたものを持ち、新しい生活に慣れていないこのような人物を作品の中で、主要な主人公にしました。捕虜の経験を持った一人の兵士を登場させて、新しい生活・新しい精神を反映すれば、ソビエット区の喜ぶべき状況を更に際立たせることができるからです。他方では、圧迫に素朴に反対し、欺瞞・侮辱に反対する勇気が彼の身から発せられるということは、比較的自然なことです。なぜならば、中国の人々はこのような不屈の反抗精神をみんな持っているからです。このことは私が中国の農村での長い暮らしの中から体得したのです。

“太原船上”は私が1931年に帰国後の最初の小説ではありませんが、その年の計画の中で書こうとしていた作品です。この作品を書く時、折よく魯迅先生から「小説の題材」に関するご返信がありましたので、非常に嬉しくなって、沙汀と作品を魯迅先生へ送って、看ていただきご批評をお願い致しました。私

が送ったのが“太原船上”です。魯迅先生は私の“太原船上”と沙汀の短篇小説とをご覧になって、私たち二人へ一通の返信をくださいました。その返信と原稿とはいずれも魯迅先生と許広平先生のご両名が親しくご自分で送りかえされました。あの時、魯迅先生は虹口区の横浜路の景雲里に住んでおられ、私と沙汀とは横浜路の徳安里に住んでいて、お互い距離が近かったのです。

魯迅先生の私と沙汀へのご返信には、私たち二人の作品を読んだ、“太原船上”は素朴で、誠実に書いてあると述べてありました。この返信はもう失くなってしまいました。しかし、沙汀はその内容を知っています。返信と“太原船上”とは沙汀が保管していましたが、返信がどのようにして失くなったのか分かりません。私自身は1933年3月から9月まで、国民党に逮捕されて、上海と蘇州の二個所の監獄に収監されていました。幸いにも、“太原船上”は沙汀が保管していたし、また彼が喬誠というペンネームで一期で発禁になった“文芸新地”に発表しました。もし、私が保管していたら、捕えられた時に一緒に消滅するか、没収されて日の目を見なかったでしょう。

中田先生、以上述べたのが“太原船上”創作の経過です。ご満足いただけたでしょうか。お知らせ下さい。

敬　具

艾蕪

1982年1月8日于成都

中田喜勝先生：

来信説要將拙作《太原船上》這個短篇小説，訳成貴国文字，我表示歓迎。又説要我講講写作這篇小説的情形和構思的原因。事隔多年了，不易記的準確。這篇小説是1931年冬天写的。材料是1931年春天開始搜集的。我1931年春天被統治緬甸的英帝国主義，従仰光押送到香港，経過槟榔屿和新加坡都不准登岸，到了香港還在拘留所関了一夜，第二天驅逐回厦門。到了四月，我到上海，坐的輪船，就是英国太古輪船公司的，名叫“太原号”。我的小説的名字，就是従這個《太原号》取的。到了上海，看見上海還有英租界、法租界，為帝国主義所有的地方。《太原船上》有反対帝国主義的含義，有我自身的体験的東西。這是第一点。

第二，我到厦門不久，過了春節，即旧歴新年，我由友人的介紹，到同安

県的鄉下，曽營那村子裏的小学校居住。小学的教師，蔵有上海二十年代出版的新文芸刊物，如《拓荒者》《萌芽》《巴爾的山》……大都是宣伝無産階級革命的。同時也従小学教師那里，听到閩西蘇區的新生活情形如土地革命、男女平等，一系列的好現象，使我感到新的中国在誕生了，十分令人鼓舞。這些精神是表現在《太原船上》了。

第三，我知道当時的蘇區，進行游擊戦爭，不虐待俘虜，尽量加以教育，要離開，便給以回家的路費。我便以這様的人物，頭脳裏有許多落后東西，不習慣于新的生活，作為主要的作品中的主人。由他這個作過俘虜的兵士，来反映新的生活、新的精神，就更能突出蘇區的可喜情形。另一方面，従他身上発出原始的反対圧迫和反対欺侮的勇気，比較自然。因為我們中国人民都具有這種不屈服的反抗精神。這是我在中国農村中長期生活所領会到的。

《太原船上》不是我1931年回国后所写的第一篇小説，却是那一年写作計画中要写的一篇作品。写作這篇作品時，正好得到魯迅関于小説題材的回信，很高興，便和沙汀把作品送給魯迅先生審閲。我送去的一篇，就是《太原船上》。魯迅先生看了我的《太原船上》和沙汀的短篇小説，回了我們両人一封信。信和原稿都由魯迅先生和許広平先生両人親自送回的。那時魯迅先生是住虹口區横滨路景雲里，我和沙汀則住在横滨路徳安里，相距很近。

魯迅先生回我和沙汀的信，談他看了我們両人的作品，説《太原船上》写的樸実。這封回信，已打失了，但沙汀還知道内容。信和《太原船上》都由沙汀保存，不知信怎様打失的。我自己則在1933年３月至９月，被国民党逮捕，在上海和蘇州両地的拘留所関押過。幸好《太原船上》由沙汀保存，又由他用個筆名喬誠発表在出了一期即被封禁的《文芸新地》上。如果由我保存，可能在被捕時一道遭到毀滅或没収，不会出現了。

中田先生：以上講的，就是《太原船上》創作的経過，是否令您満意，希来函示知，此致

敬礼！

艾　蕪

1982年１月８日于成都

上記書信から要点を抜き出すと、次の通りになる。

第一点：イギリス帝国主義への反抗精神が艾蕪の心の根底にあったこと。

第二点：福建西部のソビエット区の新しい生活の中に、新中国の誕生を予感し、鼓舞されたこと。

第三点：捕虜の経験をもつ兵士を主人公にすれば、ソビエット区の状況を際立たせることができ、他方、欺瞞・圧迫・侮辱に反対するのは自然の人情であり、特に中国の人々はみなその不屈な反抗精神を持っているのを強調したいと考えたこと。

以上が、著者の艾蕪自身が語った“太原船上”の構想の要点である。

次に，艾蕪先生の貴重で深甚なご好意に対して、筆者は次のような返信を早速さし上げた。個人的な返信をここに掲げるのは日中人士の友好交信の一記録としたいだけであって、他意は全く無いことを理解していただければ幸甚である。

筆者から艾蕪先生への返信

艾蕪先生：

您好！王沙的信、“作家的童年”和您的信都已経収到了。実在多謝您們的好意。説実話，以一日千秋之思等着您的信，今天（1月20日）才得到。在百忙之中，您写得那么詳細使我十分感激而加以満足。

信中，偶然発現了一個地名叫同安県，吃了一驚。一月二日我坐着公共汽車従福州到廈門去的時候，通過同安県。我又通過您曽住過的地方，這不是一件驚異的事嗎？

十二月二十九日到了上海就回想起您的楊樹浦時代。但，可惜在通過同安県時，我還不和道這個村裏有過您的故居。只看見窓外散有花盛開的油菜、一面緑油油的麥田而已。若我先知道這件事，一定会有特別的感懐。

不知何日得見您，但在這次旅程中有一位叫何為先生迎接我，招待得非常親切。

“人生易老天難老，歳歳元旦。今又元旦，榕城人情分外香”。元旦之夜，我在何為先生的家裏過了両三個小時，暢談得象是一位知己朋友。我比他大一歳，我們的青春都在同一時期内。

到廈門後，走着中山路就回想起新加坡的街路。両者相互極其類似。原来，廈門也是同您有関的地方之一啊！我又到了您曽住過的地方。這還不是一件有縁的事嗎？

春節過得如何？　只怕衆客接踵来拝訪您，使您疲勞極大。請保重身体。此致

請向全家問好

崇高的敬礼！

1982年1月20日
中　田　喜　勝

艾蕪先生：

拝啓、王沙さんの書信、“作家の幼年時代”そして先生の書信はすべてもう受取りました。皆様のご好意、誠に感謝致します。実は、先生からのお便りを一日千秋の思いで待っておりましたが、今日（1月20日）、やっと入手致しました。ご多忙中、実に詳しくお書きになられ、誠に感激し、かつ満足致しております。

お便りの中に「同安県」という地名を発見して大変驚きました。一月二日、私はバスで福州から厦門へ行った時に同安県を通過しました。私は又もや先生がお住みになったことのある場所を通り過ぎました。これは奇妙なことではないでしょうか。

十二月二十九日に上海に着くと、先生の楊樹浦時代を回想致しました。しかし、残念なことに、同安県を通った時には、その村に先生の故居があったとはまだ知っていませんでした。ただ、窓外には満開の菜種の花が散在し、青々とした麦畑が一面に広がっていただけでした。もし、前以てこのことを知っていたら、きっと格別な思いがあったはずです。

いずれの日に先生にお目にかかれるのか分かりません。しかし、この度の旅の途中で、何為先生というお方が私を迎えてくださって、大変親切にもてなして下さいました。

“人生　老い易く、天　老い難きも、歳々、元旦あり。今、又、元旦。榕城（福州市の別名）の人情、分外に香し。”元旦の夜は、何為先生のお家で二三時間を過ごし、まるで知己のように話がはずみました。私の方が一歳、年長ですから私たちの青春は同じ時期であったのです。

厦門に着いて、中山路を歩きながら、シンガポールの街並みを思い出しました。両者はお互によく似ていました。なんと、厦門も先生と関係のあった場所の一つだったのですね。私は又もや先生がお住みになった場所に来たのです。これは因縁のあることではないでしょうか。

旧正月は如何でしたでしょうか。多くの客人が次々に来訪されて、先生は

大変お疲れになられたのではと心配しています。どうぞお体、ご大切に。皆様にもよろしくお伝え下さいますように。

敬　具

1982年1月20日
中　田　喜　勝

注：　何　為
中国の著名な散文作家。1922年浙江省出生、現在、福州市居住。著書に「臨窗集」(百花文芸出版社・1980) があり、“第二次考試”・“臨江楼記”など四十篇の散文が収められている。

3　上海時代の艾蕪

英国の太古公司の汽船、“太原号”は霧が立ちこめ、広々とした太平洋の中を航行していた。衝突事故を防ぐため、動き出そうとしている正面の汽船と互いに汽笛をしばしば鳴らし合った。汽船は厦門から上海へ向かっていた。私は一人の旅客であったが、ビルマからイギリス帝国主義によって追放され帰国させられていたので、心中、霧が立ちこめたようで、今後どのように暮らしていったらよいのか分らないでいた。職を捜し出せない苦しみが何処にでもあるのを私はよく知っていたのである。厦門に居た時、“香港之夜”という散文一篇を書いて、上海光華書局出版の“読書月刊”に投稿した。上海の文芸界の門を敲き、海外流浪から帰って来た“遊子”を受入れ得るのかを知りたくて試してみたのである。上海に着いて、方々の書店にも行ったが、足は光華書局へ、いっそう自然に向いた。文章が載っていて、私を全く有頂天にさせた。だが、手紙を出して、その出版物と原稿料とを請求すると、大海に沈んだ石のように返事が得られなかった。私は一軒の小さな旅館に泊っていたが、宿賃と食費が一ヶ月九円であった。ビルマの華僑と文化界の友人がカンパしてくれた生活費は、殆んど底をついたが、小さな旅館なら一・二ヶ月泊っても支払いはできたのである。一日中、為すこともないので、そぞろに書きものをした。二日にもならないのに、ある人がドアをノックした。かなりいい服装の男が入って来て、目の前に帳簿を置き、私に向かって言った。「あなたは読書人ですから、どうか我々の図書館に寄附を少々なさって下さい。多くは要りません。一円銀貨でも。」さらに帳簿をめくり、指さして言った。「ホレ、五円・十円と寄附した人もいますよ。」

彼は人相が凶悪で、只者ではないように見えた。上海には流民が多く、彼らと紛糾を起こさないのが一番よいと私は知っていたし、少しも出さないのもよくないと考えて、彼に一円を与えた。彼は出て行って、ボーイたちへ案の定、目配せをした。ずっと泊っていたら、恐らく面倒なことがあれこれ起こり、よくないだろうと感じた。

私は幸いなことに一人の知人を思い出した。雲南出身の王秉心である。当時、彼は江湾労働大学で勉強中であった。彼とは昆明で知り合った。1926年の冬、彼は自分の郷里の易門で冬休みの義務教育を開き、私は請われて一ヶ月教えたことがあった。私が1927年の春、ビルマへ行こうとしていた時、彼は求学の為、上海へ出ようとしていた。彼は旅費の中から六・七円を私にくれた。私はラングーンの新聞社で、校正や編集の仕事をしていたが、国内の出版物や新聞には注意していた。労働大学の出版物（名称は記憶していない。）に彼が文章を発表しているのを見て、彼だろうと思い、手紙を出してみると、早速、昔の友情に接したのである。彼に会いに行って、彼は宝山県泗塘橋労働大学農学院の園芸科で学んでいることが分かった。彼は早速、私の為に農家に一部屋を借りて住まわせてくれた。台所つきであるのに、一ヶ月、僅か一円の家賃であった。自炊だから五・六円で充分であった。農家に住んでいると、銭も節約でき、安全でもあった。腰を落ちつけて文章が書けるし、邪魔も入らなかった。私はほとんど毎日、労働大学農学院の閲覧室へ新聞を看に行った。

王秉心は文芸好きで、労働大学に「拿波（Labor）劇社」があって、彼はそれに参加し入っていた。イブセンの“人形の家”を演出し、自分は“フォルモー”の役に扮して演じた。黄源の昔の妻の許雨田がナラを演じた。劇社はさらにドォデット（Alphonse Daudet 1840～1897、フランスの小説家。短篇集“製粉工場書簡”がある。筆者注）の“製粉工場書簡”の中のザガーレンに関係のある人物の作品を改編し、王秉心も劇の中で、一人の比較的重要な役を演じた。彼は解放後、昆明の花燈劇団の団長になったが、王旦東と改名した。文化大革命の際に、無理に故郷へ帰らされ、恨みをのんで世を去った。私が帰国して最初に上海の話劇を観たのは、労働大学の“拿波（Labor）劇社”の演出したもので、祖国の文芸のムードを呼吸したようであり、文芸の仕事というその方向へと私が歩いて行くのを励ましてくれた。しかし、大して自信があったわけではない。私は王秉心に何か仕事を捜すのを助けてくれるように頼んだ。労働大学は江湾の工学院に設置されているので、付属工場もあるから見習工を招くかも知れないと彼は言った。しかし、実際に面談の結果はただ失望しただけであった。することもなく、

相変らず、腰を下ろして書きものをした。私がラングーンに居た時もそのようにしたが、稿料は少ないのに自分を養うことができた。熱帯地方では二着の単衣ものでよかったし、棉入れ、棉入りのズボンそしてチョッキは使用しなくてよかった。貰う銭が少なければ少ないで、裁縫台を借りて一晩眠り、掛け布団も使わなくてよかった。上海に来てみると、確かに衣食住の煩しさがあって、ただもう懸命に書かざるを得なかった。私は「時事新報」の“青光”副刊に散文を少し投稿し、題名は“ビルマ漫画”として、異国の特殊な風俗習慣を描いた。用いたペンネームは“荷裳”で、実は“和尚”の音訳であった。私はビルマ華僑の僧侶、万慧法師の書生となったことがあるので、彼を懐しんで和尚からの名を用いて一つの記念とした。文章は登載された。しかし、原稿料を貰いに行くと、まるで乞食を呼ぶようにあしらって、私に一円をくれた。私はその場でその紙幣を引き裂き、二度とは「時事新報」へは投稿しないことにした。現代書局出版の“現代文学評論”が短篇小説を募集していたので、私は一篇を投稿した。彼らは応募の入選作者を公表した。第一席は王家棫、第二席は徐転蓬、第三席が私であった。私の小説はシンガポールを背景とし、華僑の失業労働者を描き、鉱山労働者と船員の苦しい生活を述べたものである。三名の小説はいずれも現代評論には載らないで、一冊の小冊子で出版された。私は手紙を書き、原稿料と私の文章が載った小冊子とを要求したが、全く相手にしてくれなかった。上海の出版業者は駆け出し作家へはこのように応待したのである。当時、彼らの出版した小冊子を銭まで出しては買わなかったので、今に至るまで、小説の題名を思い出すことができないし、大海へ投げこまれた一粒の石ころとなってしまったのである。

私はなすべきことも無く、捜すべき職もないので、日の長い夏の季節を書きもので過ごさざるを得なかった。私は鄭振鐸が編集していた「小説月報」に小説を一篇送った。後に初版の「南行記」に収められたので、“洋官与鶏”という題名であったことを今でも記憶している。しかし、「小説月報」は採用せず、きれいな印刷のことわり状と原稿とが一緒に返って来て、“滄海遺珠”と評してあった。これには私も挫折を感じたが、それでも書き続けねばならなかった。題材が昔の流浪生活に及ぶと、構想が潮水のように湧いて来て、押し止められなかったからである。更に又、四年間も離れていて帰って来た祖国は、耳にし目にすることは帝国主義の直接統治の植民地よりも劣っていたのだ。1931年5月1日、私は呉淞から汽車で、上海北駅で下車し、駅前の小さな広場を通り、丁度、狭い通りに入ろうとしていた時、印度人巡捕、中国人巡査を連れた英国の

巡察官が突然私を遮り、全身の上下を検査し、強盗扱いをした。私はラングーン・マンダレー・ペナン・シンガポールでもそのような侮辱は受けなかったのだ。同時に上海の中国人、特に中国人労働者は帝国主義反抗の闘争に勇敢であり、激烈異常であった。イギリス帝国主義は祝日になると、とりわけメーデーには戦々競々となって大敵に臨むかのように武装して出動し、仰山な捜査をしなければならず、そのように警戒して備えるようでは、彼らの統治は全く失敗するように見えた。私は我慢できずに、反帝というこの重大な闘いに対して、必ず力を出そうと思った。たとえ文字の上に表現してもよいのである。これも写作への刺激の種を私に増してくれた。

泗塘橋の農家住いは、いかにも閑静であり、寝室は暗かったので、入口の二つある台所で書きものをした。頭を挙げると、木槿の花の垣根が見え、垣根の外は緑一色の棉畑であった。煉瓦のカマドと鉄鍋があっても、私の抱負を傷つけることはなかったし、木槿や棉花もまた充分、風情があった。しかし、思いがけないことが発生して、私を悲しませ嘆かせたのである。私が住んでいたその農家の庭には、家族の住む二三軒があって、いずれも女の子たちが“蘊藻浜紡績工場”へ働きに行っていた。朝には、数人の色の青白い娘たちが深夜労働を終え、帰宅して休息し、夕方には出勤して、田野の中から彼女たちの姿は次第に消えていった。最初は、私はそのような家庭はいいものだ、男は耕し、女は機織り、畑仕事と工場の仕事があるのは実に得難いものだと思っていた。しかし、或日の午後、隣家の奥さんが私に会いに来た。手には一通の手紙を握っていて、読んで聴かせてくれと私に頼んだ。彼女は見たところ、五十歳ぐらい、痩身でヒョロヒョロし、顔中、皺だらけで、寂しげな顔つきをしていた。彼女には独り娘がいて、紡績工場で働いていた。夫は早く世を去ったらしく、男の子は無かった。この母娘二人の家族はひっそりと暮していて、話し声もめったに聞こえず、笑顔など一向に見たことがなかった。彼女は先ず私に尋ねた。

「お知らせ下さい。手紙はどこからですかのー。」

私が便箋を抜き出してみると、最初に書いてあったのは、“お母さまへ、拝啓、小生は宝山県人で、厦門でお嬢さんと知り合い、言づけを頼まれました。」とある。読んで聴かせると、文語体のことばは彼女が聴いても分からないので、私に解釈を頼んだ。私は彼女に尋ねた。「あなたの娘さんは厦門にいるのですか。」

「いるもんですか。」彼女はびっくりして、寂しげな眼を大きく見開き、すぐせきこんで尋ねた。「早く見て！　その人の名は何ですか。」

私は手紙を全部見てから、彼女に名前を教えた。すると、彼女は嬉しそうに

叫んだ。「そうです。あの娘です。その名前です。あの娘は五年前にいなくなった。まだ憶えている、あの日は雨降りで、朝、あの娘を待ち、夜にも待ち、翌日もあの娘を待ちましたよ。外の人たちは夜勤を終って帰り、帰ってまた行きましたが、あの娘の姿を見ませんでした。父親が工場へ尋ねに行ったり、上海の親戚の家を尋ねたりしましたが、どこも分かりませんでした。可哀想にあの娘の父親は腹立ちまぎれに死んでしまいました。こんなことを話してもなんにもならん。教えて下さい、早く。あの娘はそこで何をしてるんですか。まだ紡績工場で働いているんですか。」

手紙にはこう書いてあった。差出人のこの宝山県人は厦門で商売をしていたが、妓院へ行ってある妓女と知り合った。妓女も宝山県人で、昔は紡績工場で働いていたが、悪漢に騙されて連れ出され、厦門に売られて来て妓女になったことが分かった。今、帰りたい、銭を出して苦海から脱れるよう身請けしてもらいたいという手紙を人に書いて貰っているのだ。奥さんはそんなに嬉しそうにしているが、数年間失踪していた娘は案の定、苦海に沈んでいるのが分かった。私はずっと彼女を眺めていたが、娘の苦しみを知らせるに忍びなかった。といって、知らせないわけにもいかない。家族が銭を出し、自分を救ってくれるように娘は正に求めているのである。ついに知らせると、奥さんは茫然となり、すぐに泣き出した。隣家に帰っても、奥さんはまだすすり泣きながら言っていた。「飯も食えないのに、どんな銭が出せると言うんか。」働く人々の苦難を帰国後、初めて知って、私は長い間、やり切れない気持ちだったし、永遠に忘れることができない。この種の人々にとりついている苦難を解放救済できなければ、少なくとも筆で表現して全国の人々の注意を喚起し、激しく啓蒙すべきだと私は考えたことがある。上海の状況についてあまり深くは理解していなかったので、この事件はずっと書かないでいた。しかし、比較的に熟知しているビルマ辺境の人々の惨めな生活を書くように私を促がしたのである。“南行記”の中に収めた“洋官与鶏”はこの時期に書かれたものである。

その後、北四川路で沙汀と偶然、出逢って、上海へ居を移し、彼と一緒になお文章を書き続けた。彼と連名で魯迅先生へ書信を送り、小説の題材について教えを請い、同時に作品を送って教えを請うた。(私が送った一篇が“太原船上”) 更に私は短篇小説“夥計”(“南国之夜”小説集に収められ、“艾蕪短篇小説選”にも入っている。) を書いて、「北斗」という雑誌に投稿した。作品は登載されなかった。(後に「北斗」の主編の丁玲同志の話によると、“夥計”は小資産階級の性格があったので、「北斗」には発表しなかったとのことであった。) しかし、後で手紙が来て、彼らが挙行

する「北斗」の読者座談会に参加を求めて来た。会場は北四川路の喫茶店の二階であった。参加した読者は僅か三名で、私以外には李輝英がいて、彼は当時すでに作品があり、「北斗」に載せられていた。他の一名は女性で、朱曼華とかいったが、作品があって、「北斗」に載せられたかどうか憶えていない。三名の読者以外に、有名な作家も幾名か出席していた。鄭伯奇・丁玲・馮雪峰・葉以群（当時は華蒂と呼ばれた。）などの人がいた。その後、私にしばしば連絡をとってくれる人がいた。最も多く来たのは、覃曉晴（当時は静子と呼ばれた。）で、外に彭柏山（当時は彭冰山と呼ばれた。）がいた。時には大衆的な会に私を参加させた。一度は北西川路（寶禄安路であったかも知れぬ。）の学校の教室であったが、多くの人が来て、私も沙汀と約束をして参加したのを憶えている。会は鄭伯奇が司会し、林煥平は日本帝国主義が中国を侵略している情況について説明した。

1932年春、すなわち“一・二八事変”の後、“左联”は私をグループに入れ、茅盾・銭杏邨の両名の先輩が私と同じグループであった。このことは私を不安にした。主な理由は、私は別にどんな作品も発表していなかったし、作家の仲間に肩を並べることができなかったからである。しかし、非常に嬉しくもあった。文学の面で大きな指導を受けられると思った。惜しいことに、茅盾同志は写作に多忙で参加できず、そして阿英同志は南京路の“大三元”という広東料亭で私と向かい合ってお茶を飲まれたが、その当時の国内外の政治事情を話されただけで、文芸思想や創作の傾向には言及されなかった。以前、ある人が“左联”のことを私に尋ねたが、忘れてしまっていることもやはりあった。私は顧鳳城・謝冰莹のグループに参加したことがあったが、グループの長はやはり銭杏邨であった。このグループでの学習は短かく、銭杏邨はその後のグループの会に私を誘わなくなった。後で風の便りに聞くと、グループの長が私を疑っているとのことであった。早速、私は泰東書局の銭謙吾（銭杏邨の別のペンネーム）へ手紙を出して、私の政治上の態度を表明した。私は海外に在って、政治理論を何ら学んだことが無いし、上海に帰って来ても、本を買う銭も無く、ただ素朴な信仰があるだけである。国際上では、レーニン・スターリンが指導するソ联を擁護する。国内では毛沢東・朱徳が指導するソビエット区を擁護するのだと。

銭杏邨からは返事が無かったが、丁玲が私に会いに来て、私を別のグループ、金奎光（朝鮮人）、杜君慧とのグループに私を入れてくれた。出席して指導したのは丁玲であった。グループの会が開かれると、何時も政治問題が話された。この時期には、なお作品を書く時間が私にはあった。「文芸新聞」に新詩を二篇

投稿したことがある。一篇は“杜夫的歌”で、黄浦江、江岸の“華懋ホテル”前の波止場の労働者を描写した。他の一篇は“示威行進曲”で、失業労働者のデモ行進を描写した。「文芸新聞」はみな載せてくれた。私が使ったペンネームは沙漠であった。出版物は“左联”のメンバーが扱っていることを知っていたので、(当時は編集者が華蒂と適夷とであることを知っていただけである。)原稿料を要求する手紙を出したり、出版物を求めることはしなかった。“左联”のグループは文芸について話すことが非常に少なかったので、私がどんな作品を書いたのか、どんな文芸作品を発表したのかは話さなかった。沙汀一人だけが沙漠というペンネームで私が詩を発表したことを知っている。

「北斗」の座談会で知り合った李輝英は、彼が“左联”に参加していたことを私は知っていたので、同じグループではなかったが、個人的には往来があった。彼は私に何篇かの短篇小説があるのを知って、二篇を曽今可が編集する出版物に渡して発表した。(小説の名は思い出せないが、“洋官与鶏”があったようだ。)というのは、曽今可編集の出版物が以前に彼の作品を披露したことがあったからである。小説発表後、私は李輝英と一緒に曽今可に会いに行って、面と向かって、彼に原稿料を請求すると、彼は自分の出版物の印刷費に困っていると、頑固にそれを口実にして、一文の原稿料も出してくれなかった。後で知ったことだが、彼は“国事管他娘；打打麻將”(国のことはいい加減、麻雀ばかり打つ)　というようなそんな文人が出版するのには原稿料を支払うようにして、日を過ごしていたのである。

私は上海でもう一年になろうとしていたが、投稿しても原稿料は無く、生活はビルマ華僑の友人からの援助カンパに全く頼っていたが、上海の友人からも借金して暮していた。意識形態の面がまだすっきり改造されていない小資産階級であったとしても、日常の物質生活の面ではかなり工場で働いている無産階級に及ばなかったのである。書いた文章は銭にならぬことがはっきり分かっていたが、私はやはり書いた。左翼作家联盟に参加したからには、どうしても自分自身を空虚な文人にしてはならないからである。

多分、この年の夏であったろう。丁玲が私を楊樹浦の労働者地区に工作に行かせた。そこには“左联”が早くから小学校を開き、漣文学校と呼ばれていた。校舎は一部屋で、生徒はすべて労働者の子ども、一番多い時には二三十名いた。夜間、学校が空になると、男女の労働者の補習学校に変って、彼らに字を教えた。こういうことから、男女の労働者の中から作品が書ける所謂、文芸通信員が養成された。この工作は文芸大衆化と呼ばれるものであろう。そこで、私は

又、文芸大衆化委員会の一つの職責を負担した。当時、私はこの仕事を受けて非常に嬉しく、労働者に接近するのは私の思想改造にも、また労働者の生活を理解して、私の写作を充実させる上で、いずれにも大いに稗益するものがあると思った。以前から居た教員は詩人の風斯であったが、彼は私に仕事を譲ると辞めて去った。

校長は王という姓で、湖南人であったが、学校の授業には全くかかわらず、一時限も教えはしなかった。彼はただ学校の対外的なそのようなことを処理した。“左联”は彼に毎月八元を支給したが、私は小学校はうまく運営してぜひ生徒の家庭に満足させるようにと彼に相談した。彼は老朽化した家を引払い、別に清潔な平屋の家をば借りた。教室の広接間には更にペンキを塗り、万国旗をたくさん吊した。私と校長とは亭子の間に住み、紡績工場の童工をしている彼の十三四歳の娘がこれに加わった。前の建物は少し大きくて、独身の女工がたくさん住んでいた。彼女たちは湖南の田舎から来ていて、湖南人経営の恒豊紡績工場で紡績の仕事をしていた。後の家は狭く小さくて、一人の女教員が住んでおり、趙敏と言ってやはり湖南人であった。この学校のやり方をみると、“左联”が八元を出し、更に専任の教員に支払う外に、外部の別の組織も銭を出したり、人員を出したりしていた。私は尋ねもせず、尋ねられもしなかったが、ただ昼夜きちんと教え、同僚との仲はうまく行っていた。

昼間、小学生に教えるのは容易に処理できたが、夜の補習学校はうまくは教えられなかった。男女の生徒は紡績工場の労働者で、大多数が十七八歳、字を識ることから始めねばならず、早く養成して文芸通信員にし得るものは一名もいなかった。このことは私を悲しませた。工場の中の知り合いの仕事仲間に手紙が書けたり、新聞の読める人はいないのかと私は彼らに尋ねた。彼らは交際が狭いのかいつもそんな労働者は珍しかった。

趙敏は一ヶ月そこそこ教えると辞めてしまって、また周海涛という女教員が来た。聞くところによると、長沙の周南女学校を卒業していて、湖南の益陽の人であった。何時も近眼鏡をかけていて、一目で教員と分かった。しかし、革命への情熱は強く、私たちと深夜に標語貼りや伝単まきにしばしば出かけ、時には、昼間にもデモ集会に参加して、巡査に追いかけられると、まるで男のように走り逃げて警棒をかわした。彼女の夫は陳鑑堯といって、江蘇の宣興の人で、皆は彼を阿尹と呼んでいたが、労働者運動をしているインテリであった。名前は憶えていないが、彼女の兄嫁もインテリで、ある紡績工場で働らいていた。兄嫁の夫はモスクワで学習していた。彼女の妹は中学校の生徒で、当時、

絹織物工場にもぐりこんで働いていた。労働者と接近するこのインテリ家族を始めて知り、続いて彼らと関係をもったことから、労働者群衆の中で活動している多くの男女のインテリと知り合いになった。すでに労働者となっている人もいた。彼らは書く能力があったので、労働者の文芸通信員を迅速に広めるには、彼らが重要な対象の一部分であると思った。

更に日が経つと、周海涛を訪ねてくる人がいたが、彼らは私が“左联”から派遣された教員であり、また文芸通信員の工作をしている者であることを知って、自発的に自己紹介をし、自分は文章が書けるとか誰が書けるとか言う人がいた。労働者風の服装をしたある人が自分は「北斗」に文章を発表したことがあり、署名は匡廬だと私に言った。これらの緒口に対しては、私は当然しっかりつかまえておかねばならなかった。昼間、夜間の授業を終った深夜または日曜日を利用して、彼らに会いに行って、できるだけ暇を見付けて、少し文芸の写作をするように彼らに頼んだ。この工作の為に、楊樹浦の労働者地区で活動するだけでなく、更に梵王渡・曹家渡及び黄浦江上流の周家渡へも行った。工場の雑役夫の魏辛という者がいて、写作ができ、雪葦というペンネームでよく散文を書いていた。その後、私が蘇州で入獄中に獄中で彼と出逢い、彼が貴州でとっくに組織に参加していたことを始めて知った。彼は人の“また紹介”で私と連絡をとっていた人であった。私が捜した文芸通信員には少年工出身の地道な労働者は一人もいなかったのである。

具体的な例を挙げて話してみよう。1933年、私と同じ事件で逮捕された六名の労働者は私と最も連絡のあった人々であった。二名の馮という姓の人たちは浙江義烏の人で、組織の地道な労働者であった。二名の顧という人は江蘇宝山の人で、熟練した絹織物職工であった。彼らは手紙を書くのが非常に困難であった。文芸通信を書くようにと彼らにどうして要求できようか。それ以外の二名の労働者は教養があり、一名は阿尹といって、前に述べた周海涛の夫である。他の一名は上海人の胡逸樵で、小学校の教員をしたことがあるそうである。彼らは書けたが、文芸作品を書くにはやはり少し困難で、大いに力を入れて養成しなければならなかった。私は彼らと連絡をとり、彼らを通して、教養のある労働者または労働者運動をしているインテリを更に捜し出すことを望んだ。

このような活動によって、文芸大衆化の工作は順調に進行した。時には、数人を迎えて虹口公園の芝生で会を開いたが、丁玲が出席して指示をしたこともあった。多忙な活動のそんな環境の中では、私には写作のための少しの時間も失くなってしまった。その点は惜しくはなく、しばらくは筆を執らなくてもよ

かった。ただ何人かの文芸通信員や文芸好きの労働者及び労働者群衆の中で活動しているインテリ分子が私にどんな作品を発表したのか看せてくれとか学ばせてくれとか言われると、私は答えようがなくて、ただ赤面するだけであった。それは大したことではなかった。私たちをひそかに最も苦しめたのは、生活が大問題となったことである。小学校を教え、夜学を教えても、賃金は“びた一文”も無かった。人と連絡するにも、車代はなく、全く二本の足に頼って歩いた。東の方の楊樹浦から西の方の兆豊公園へ行って会を開くのに、私は足で歩いた時もあった。靴下は破れても換えようもなく、人々から見られると、自嘲して言った。「これは底なし印の靴下さ。」と。幸いにも私を支えてくれる友人がやはりいて、借金ができたし、海外の友人からも救済を受けることができた。

私は漣文学校で一学期も教えないで、李輝英に私の代わりに教えてもらった。学校は人から注目されていると云うのである。というのは伝単をばらまいたり、標語を貼ったり、特にデモ集会などはすぐに身分がばれるからである。私は教えなくなったが、文芸通信員の工作を発展させる為に大いに努力した。それでも、私は写作の時間を少し捻出することができた。「文学月報」主編の周揚が私の以前に（楊樹浦へ行く前）書いた小説“人生哲学的一課”を持って行って茅盾に看てもらうと、載せてよいということであった。周揚がまた私へ言った。「君は二段まで書いているが、もう無いのか。」私は更に第三段を書き加えた。このようにして“左联”の出版物に発表されたのである。しかし、原稿料はやはり無かったし、私も請求はしなかった。陸万宾が北平から来て北平の“左联”が出している「文学雑誌」に投稿するようにとのことであったので、私は“在茅草地”（後に「南行記」に収めた。）を彼に渡して、一応の義務を果した。

当時の“左联”（及び北平の左联）が出す出版物は、何期か出すと発禁に遭って、損失が大きかったことを私は知っていた。大書店は出版をためらい、小さな書店は危険を冒かして何期分か出しても、損失を受けるのを心配して、原稿料の支払いを渋った。著名な作家へは原稿料を出していたようである。このような状況の中で、左翼文学運動を盛んにする為に、私たち若い盟員は力をいろいろ捧げようと願い、報酬を求めることはしなかった。今に至るまで、すでに数十年が過ぎたのに、今更、原稿料の件を持ち出すのは、ただ当時のことを説明したかっただけである。年から年中、上海に住んでいて、一文の収入も無く、生きて仕事を続けるという苦しい気持もあったのだ。このように苦しい盟員は、当然、私一人だけではなかった。しかし、皆、個人の生活のことは話さず、一たび顔を合わせると、仕事の話や政治の話をするだけであった。

“左联”とその指導をしている各級の党組織は、盟員に対して十分、関心を持っていた。ただ、盟員が極端に困難な条件に遇って、始めて援助の方法に手を尽くした。1933年3月3日の午後、私は曹家渡の或る絹織物工場に行って、労働者と連絡をとろうとして逮捕されてしまい、南市の偽上海公安局の拘置所に入れられた。二十日あまり経って、拘置所の看守が大声で叫んだ。「居るか、湯艾蕪というのは！　外に弁護士が会いに来てるぞ！」拘置所には十いくつかの大小さまざまな牢房があって、庭に面する処には、すべて柵があったが、閉ぢこめられた人々はお互いに望見することができた。私が入れられた小さな部屋には、約20名あまりの囚人がいたが、二名の誘拐犯を除けば、すべて政治犯であった。床板が無く、皆は地の床に眠り、一つの部屋はぎっしり詰っていて、着布団を着られず、実際は着布団も無かったのだ。私と同じ部屋に閉ぢこめられた者の中に、同じ事件の労働者が四名いた。その中の阿尹はすでに述べた周海涛の夫である。彼は看守が私の名前を叫んでいるのを聞いて、私を手でこずき、小声で尋ねた。「返事するのか。弁護士が会いに来たんだ。きっと組織が送りこんだんだ。」

私は心中、大いに感動し、きっと“左联”の指導者が私の姿が見えなくなってから長く経つので、捕えられたのだろうと見做して、何とか救済する為に面会に弁護士を来らせたのだと思った。私は返事するのが怖く、阿尹に言った。「叫ばせるまゝにしとったらよい。返事はできない。」

阿尹も私が拘置所内で使用中の仮の名、“唐仁”を知っていた。弁護士が面会に来た人の名と一致しないので、返事をしない方がよいと彼も賛成した。その時、もし返事して出て行き、弁護士と会えば、偽公安局に被疑者処理上、注目させ、しばらくしたら文章を発表した時の私の名前を調べあげて、私が何をしている人間か探り出すのだ。たとえ、当時、作品を発表するのが少なかったとしても、周揚が編集した大型左翼出版物「文学月報」第5・6期合併号は正しく私の逮捕前、二ヶ月に出版されていて、私の“人生哲学的一課”が小説欄の第一篇のところに載せており、人々の注目を集めていたのである。又、同期の宣言“中国著作家為中蘇復交致蘇联電”の中に，柳亞子、魯迅・茅盾を主とした署名の中にも私の“湯艾蕪”という署名があったのである。もし、声に応じて私が行けば、国民党の為に人証・物証を提供してしまうことになる。

私はその後、拘置所の看守を通じて、(国民党の監獄と拘置所内には、ある看守は二角与えさえすれば、あなたが書いた手紙や文章を郵便切手を買い、出してくる。審査は受けなかった。) 穆木夫宛に手紙を書き、日本人が開いている内山書店から転送して

もらった。手紙の最後の署名はやはり唐仁とし、自分が逮捕されてしまったとだけ述べ、受取人が筆蹟から誰が書いた手紙か分かるようにした。このようにしたのは、万一、看守が信用できず、手紙を審査の方へ手渡すのを恐れたからであった。後で、看守はよい人で、人を売らなかったことが証明された。間もなく、葉以群と梁文若とが私に会いに拘置所に来た。(後で、彼らは公安局内の親戚や友人を通したことがわかった。)その後、梁文若はまた食糧を持って来たが、すべて“左联”の指導者が彼らに託したものである。

“左联”の指導者は私が唐仁と改名したことを知っているのに、なぜその後は弁護士を二度と送って来ないのか、そのわけは葉以群と梁文若とがまだ来ない前から分かっていた。弁護士は互済会名儀で頼まれて、私の保釈金を準備するのである。しかし、弁護士が立去ってから長くも経たない或る日、一人の女性の同志が逮捕されて入って来た。彼女は周海涛と一緒に女牢の部屋に閉ぢこめられると、(男子の牢屋とは互いに望見できた。)互済会が壊滅に過ったことを周海涛に告げた。彼女自身も互済会の人であった。互済会には保釈金が失くなってしまったのだ。それで、指導者も方策が無くなってしまったのである。

私と逮捕された六名の労働及び私たちよりも数日早く逮捕された周海涛、私たちより数日後れて逮捕された彼女の妹の周玉冰は、いずれも国民党の検察官から、“民国に違反する罪”と控訴されて、蘇州の偽高等法院の拘置所の第三監獄にぶち込まれた。“左联”盟員の梁文若は“左联”指導者の委託を受けて、また蘇州に面会に来た。それは“左联”を指導していた丁玲がまだ逮捕されていない前のことである。その後、周揚が“左联”を指導するようになって、何とかして弁護士に出廷弁護を依頼しようとしたので、魯迅は弁護士の史良の出廷費用として五十元を寄附した。(私は出獄後、魯迅が寄附したことを知った。) その結果、私と同一事件の六名の労働者とはいずれも自由の身となることができたのである。それはいずれも、各時期の指導者が盟員に対して最大の思いやりを示したことになるのである。思いのまゝに言うと、周海涛というこの勇ましく立派な女性戦士は私の仕事の為に一条の道を開いてくれたが、不幸にも腸チブスに罹り、医療も受けられずに、第三監獄の女囚の牢屋で世を去った。悲嘆慟哭の極みであった。私が知ったこの労働運動をしていたインテリ家族は、みな国民党の牢獄に入れられ、ひどい迫害を受けたことになる。この方々は中国の革命に対して貢献をされたのである。

附注：　上海師範大学の中国文学科の湯逸中同志が成都を訪問されたこ

とがあったが、私が彼と左联の状況について語ったことは、すでに《新文学史料》の第一期に発表した。重複を避けるために、別の角度から私が左联に参加した前後の状況を述べて、当時の駆け出し作家の生活が確かに苦しかったことを説明したのである。だがら、今日の若い作家を看ると、彼らの幸せを羨やましいと思わざるを得ないのである。

一九七九年九月四日
成都にて。

上記の文章は「艾蕪近作」(四川人民出版社・1981・成都) の中の“三十年代的一幅剪影我参加左联前前后后的情形”と題する艾蕪の回想記を筆者が訳出したものである。

“太原船上”が書かれた頃の艾蕪の生活の一端や“左联”のことが分かり、筆者にとっても誠に有意義だ。列国の帝国主義に対する闘争が上海に根強く続けられていたのである。艾蕪自身も筆者宛の書信の中で述べているように、“反帝の思想”が彼をして“太原船上”を書かせているのである。

新中国誕生までに多くの貴い犠牲者や堅忍不抜の奮闘精神を堅持した人々がいたことを改めて思い知らされるわけである。

ここで忘れていけないことは、“列国の帝国主義”の中には日本の帝国主義も含まれているのだということである。1930年代といえば昭和5年から昭和14年まで、この間、満洲事変・上海事変及び日華事変がある。中国の人々の被害は莫大であり悲惨なものであった。

日中両国の無辜の民衆は巨大な波涛の中に押し流され、相互に不幸な時代であった。

艾蕪の作品には日本の帝国主義を直接主題とした小説は無い。むしろ、国民党へ対する批判を主とした小説が多い。従って，1930年という時期は、中国の人々は国民党の圧迫と日本軍閥の侵略という二重の不幸を背負っていたことになる。中国の一般大衆は国民党の軍隊と日本の軍隊に対して、いずれに憎悪の念をより深く懐いていたのであろうか。一般的に論じることは出来ないかも知れない。軍隊にもいろいろな軍隊があり、また隊員にもいろいろな人がいるからである。

要するに、“太原船上”に当時の中国社会の縮図があるのだ。

太原船上

甲板も船尾も船中が身を横たえた乗客で一杯になっている。

厠の近くには厦門から乗船したある兵士がいた。海風があふり出す尿の悪臭が、彼の鼻先を絶えず見舞っている。初めのうちこそ我慢していたが、兵士は遂に腹を立ててしまった。体を起こして看ると、手荷物が一杯、人間も一杯で、まるで前線から逃げ出して一緒に集った難民そっくりである。身を休める適当な場所としては、体を横にできるその臭い所以外には捜し出せなかった。そこで、こんな考えにもなるというものだ。もし銃があり、仲間の兵士がいさえすれば、フン、よい場所に早々と寝そべっている奴らの尻をパッと一足、蹴飛ばし、荷物と一緒に移動させてやるのにと。しかし、今はどうだろう。彼は北方の郷里へ帰る旅客の身、身近な藍布の風呂敷の中には弾丸一発も、雨傘一本も入っていないし、また当然ながら、モーゼル拳銃は身分不相応だし、軍服こそ着てはいるが、人を驚かすこともできないのだ。それは空威張りの幻想に過ぎなかったのだ。その後、相変らず臭い厠を看て、なす術もなく吐息をつき、結局、自分が遅く乗船して招いた自業自得の不運を怨んだ。

しかし、厠を吹き抜けて来る海風は人間へ少しも同情はしない。初めこそ挙措端正な紳士でも、彼の二つの鼻孔に、その匂いが徐々に入ると、急に不躾けな酔払いのように慌てまくった。それで、自分を怨む彼の気持――一人の兵士たる者がなぜここに居て、独り“鬼門関”をふせぎ守らねばならぬのか――は不公平への怒りにと変ったのだ。

その時、背の低い肥えた男が一人、震動する甲板をのそのそ歩いて来た。片方の手はずっと荷物伝いに、片方の手は湖州絹のズボンの上端を引張り上げながら、兵士のそばを通り過ぎた。厠の入口に着くと、まだ入ってもいないのに、ズボンの「マチ」を慌てて引き開け、腹の中の“生理的な水”を中めがけて勢よく排泄した。黄みがかり脂切った顔をしていて、鼠のような小さな眼をあけ、荷物の方を向いて得意げに唸った。「紅中か。紅中のポン」

「こん畜生め！」と兵士は得意げなこのデブの自分勝手な動作に立腹して、大声で怒鳴りつけ、ごろりと寝返りを打って、「シーッ」と叫んだ。自由に振舞っていたデブは兵士から思いがけない一喝をくらい、跳びあがるほどに驚いた。頭を下げて看ると、怒鳴ったのが灰色の短かい服の兵士殿であったので、カッとなって口喧嘩するのもまずいと思い、早々にズボンを直し、眼をパチクリし、薄毛の“東洋頭”を反りかえして立去った。

「わぁー三翻だ！」しばらくして、デブの歓び笑う粗野な叫び声が半切れ煙

草を挾んだ兵士の耳に伝わって来た。

この兵士は小さな街外れの静かな通りに在る小母さんの家で、幾度か麻雀をしたことがあった。彼女の娘が彼女の肩を持って、小母さんが「清三翻」で勝った晩、油灯の下にゆらゆらと浮び出ている人影が、一本の金歯を出し、目を細めて笑ったあの顔が彼の記憶のベールに映し出された。今までの怒りは何時の間にか消え失せて行ったが、それでも眠られず、他人が麻雀をするのを、ちょっと観に行きたいとしきりに思った。そのデブの叫び声のせいで、彼の賭け狂いが鎌首をもたげたのだ。だが、あの叫んだ奴は彼の面前を眼をパチクリし、ヤクザのように頭をそらして立去ったのだと思うと、全く不愉快であった。が、心機一転し、畜生、俺は兵士だ、どうして行けぬことがあるものかと、耳たぶからチビた煙草を摘みとって火を点け、右の口許に喫え、少し威張ったふりをして、急いで行った。

甲板の起重機のそば、そこが麻雀をしている場所であった。デブ以外の三人の相手の顔も脂切っていて、勿論、デブと同じように、楽しくましな暮らしぶりであった。勝負はもう三翻の後で、別の新しい局面になっていた。羨ましそうな眼付の新参者の兵士を彼らはちらりと見たが、相変らず敏捷に牌をまさぐったり、打ったりして、近くの者に瞬時も注目するような無駄なことは全くしなかった。しかし、そのデブは鼻を突然ピクつかせ、臭い匂いを誰が身につけて運んで来たのか察知したようなふりをした。それに気付いた兵士は煙草を喫え、唇をぎゅっと捻り、敵対するような妙な様子になったが、すぐに温和しくそばに腰を下ろして観戦した。麻雀をしているこの場所は確かに広くて、麻雀の四人の外に、別に二名が身を横たえ、荷物一個がちゃんと置けるのだ。だが、そこには観戦に来た麻雀好きの数人がすでに蹲まっていた。彼らは兵士と同じように、勝負に眼を輝かせ、打たれた牌を看て、賭場の戦士と共に一喜一憂し、興奮して、時には無言で溜息をつき、時には得意げに「いいぞ！」と叫んだ。

麻雀の戦士は空腹になり、疲労したので、煎餅や牛罐の類の軍糧を取出して、むしゃむしゃ食べた。

傍観していた麻雀狂たちは生唾を嚥みこみながら散って行った。しかし、兵士は立去った後、またやって来て、二名分の体を横にできる空場所に、自分の荷物を持って来てどっかりと置いた。

牛肉を嚼んでいた一人の麻雀戦士が言った。「すまんが、そこには人がいるんだ！」

兵士は少し血走った眼を瞬いていたが、少しも相手にせずに坐りこみ、膨れた左の方のポケットから“美女”印の煙草を一箱、取出してゆっくりと封を切った。

デブは頬張った煎餅屑を慌ててぐっと嚥み下し、嫌悪の情を極端に顔に出し、手を伸ばして兵士の荷物を指さし、大声で罵倒した。「空けろ！　そこはわしらがちゃんと取った場所だ！」

兵士は丁度、取出した煙草を一本、口許に喫え、もう一方の手は煙草入れの袋の中に突きこんで、マッチを捜していたが、中隊長よりも烈しい命令を聞いて、遂にこの豚みたいなデブの言葉にカッとなった。一般の軍人が民間人へよくするような怒りをすぐに爆発させ、激しく罵り返えした。「貴様らが占領したから、俺が占領できねえんだ。畜生め！　俺を誰だと思ってやがるんだ。」「この無礼な牛め恐くはないぞ。」デブは手にしたばかりのビスケットを圧し潰し、丸々肥えた頬を真赤にした。「これぁ誰の船だ！　はっきり言えぁ英国人のだぞ。そんでも暴れるんか。どっちみち勝ち目は無いぞ。」

「そうだ！　英国人のところへ連れて行くぞ。それでも暴れるんか。」別の麻雀戦士が助太刀をした。

「英国人めがおれのここを嚼むんか。畜生！」兵士はもう立上り、口許から煙草を摘まみ出し、自分の灰色のズボンの「まち」のところを指さしている。

「馬鹿野郎！」デブは躍ね起きて罵った。

「貴様こそ馬鹿野郎だ！」

「やるか、やるんか、やるか……」その三人の麻雀戦士は拳骨を構えて殴りつけようとしていた兵士を慌てて引き止めた。デブは驚きよけ、また怒鳴って、袖をまくり受けて立つ姿勢をとった。

この船上は喧嘩の仕掛人にはやはり事欠かないが、幸いにも周囲の人々の本心は戦禍が我が身や荷物に及ぶのを恐れていたのだ。それで、あわや拡大するかに見えた戦いもすぐに制止されたのである。

兵士が船尾の方へ引張られて行く。

デブはとみれば、二等船室の方へ自分から意気揚々と歩いて行く。

「犬め、おれは英国人に……貴様貴様が……おれをやっつけるなら……」と大声で罵る声が兵士の耳許まで聞えて来た。

兵士は怒り、甲板を跳び下りて懸命に逃げようとしたが、結局、人々から強引に引止められて忠告された。「相手が悪いよ。頼りになるのは銭だが、わしらに銭は無し、折れる方がましだよ。」

「金持ちが何だ！」兵士は拳をつくって罵った。「見たことがあるだろうが、丹那を。今日は金持ちでひどいことをやっていても、一夜、夜が明けれぁ乞食だってことさ。龍岩や永安にゃそんな連中がゴロゴロしてらぁ。今の連中が小銭を持っていたって、何様ってこともねえさ。」

船尾には香港から乗船した“滇軍”がいたが、着ているのは便衣だった。彼らの師団長、盧漢は龍雲から解職され、部隊は一部が改編され、一部は解散してしまった。残った仲間の彼らは別の人から“共産軍掃討”の為に江西へ呼ばれていた。皆はこのいぢめられた仲間をその時、親切に坐らせた。その中の一人が半ば慰め半ば感に堪えないように、口を挿んだ。「金持ちって、畜生メ！おいらが車挽きをしとったら、遠慮なんかせんだった……。ビンタ・拳骨・足蹴りをたっぷり頂戴したもんだ。」

「みんな！」とその兵士は自分と仲良しになろうとしている人々を見回わした。各人、農夫のような口許や頭をしていて、猾るそうな目差しをチラつかせてはいるが、お互いに同じ職業だと分かったのだ。兵士は続けて言った。「さっきはあいつらに遠慮してやったんだ。フン、共産軍だったら、あいつら、命が十あっても足りねえぞ。」

江西へ行くこの雲南の兵士たちは、省城近くの宜良県をまだ出発していなかった時には、江西地方で造反した軍隊について大きな疑いと恐れとをずっと抱いていた。そこで、三・四名の者が我先きにと質問した。「そいつら、ひどいのか。」

「ひどいって、何が？」兵士は興味深そうに言葉を続けた。(今までの激怒はどこへやら)「それがなあ、ひどいことなんかねえぞ、少しも。おれが福建49師団の兵士だったころ、彼らとよく戦ったもんだ。あの部隊を看たら、みんな笑うかも知れん。最初、わしらの師団は龍岩を攻撃したのさ。着いてみるとさ、刀や銃を持った奴が全く見当らん。二・三日して一個中隊を偵察に出したら、フン畜生め！　山も野もずーっと敵だらけだ。老いぼれも若えのも、女・子どもも来やがって加勢をしとる。小銃を先ずぶっ放してから、棍棒・鎌・矛・鋤を手にして襲いかかって来るんだ。どうだ、よく聴け、これがあいつらの部隊さ。兄弟、笑っちぁいかんぞ。ほゝ、いいか、わしらの一個中隊はあいつらにこっぴどくやられたんだ。失なった小銃五十挺、ほんに面目無しだ。次の日に、大隊が出動、だが、あいつらはみんな山に隠れて一人も見付からん。联公が腹を立てまいことか。三月そんな風に掃討したが、馬鹿みた三ヶ月さ。小銃は半分、あいつらに寄附してしまったしな。中隊が三つも四つも包囲しに行った。あん

時、わしは運がからきし無かったんだ。そう、その通り、あいつらの捕虜になったんだ。」

話題がそこに及ぶと、車座になって聴いていたが、皆、一斉に色めき立ち、「捕虜になったって？」と息をのみこむようにして言う者もいる。

その兵士は煙草に火を点け、思い切り大きく吸いこみ、微笑を浮べながら言葉を続けた。「かえってよかったさ。辛い目にも少しも遇わんかったし。知らんだろうが、あいつらは礼儀を弁えてるんだ。仲間扱いしてくれて、大したもんだったぞ。」

全国に知れわたっている奇妙なあの伝説に興味津々のある兵士が、その話を聴くと、じっとしておれないで、瘡の出来た頭を掻きながら、慌てて口を挿んだ。「おい、兄貴、あの辺の女は男の言いなりに連れこまれて寝るって、ほんとかね。」

「ハハハ……」兵士は黄色ぽい歯を口一杯見せて笑った。「実はなあ、わしらん所で兵士になれぁそんなことをやるんだ。あの辺の女たちぁ、フン、ほんに激しいもんだ。指一本、手出しできねえ。この夫は要りませんと女が言うと、幹部は“いいよ、貴女の自由にしなさい。”と言うんだ。もし、男の方がこの妻は要らんと言うと、“慌てるな。調べてみるから待て”と言うんだ。考えてもみろ、あの辺の女はやっぱり並大抵の奴じぁないぞ。お前、そんでも勝手に引張って寝れるか。どうだ。命がけだぞ。あいつらは年寄りも若えのもみんな髪を切ってる。ほんに見られたざまじぁねえ。そんでも、肝玉ときたら、てえしたもんだ。男たちが話をしてると、女も口を挿んで、女どもの大した理屈を講釈するんだ……。」

「ふーん、そいつはやっぱし引掛けにくいな。」“瘡頭”は分かったようにニヤニヤ笑って言った。「もし、わしが捕まったら、死んでも帰って来たくねえな。」

「馬鹿！　色気狂いめ……」二・三名の男がどっと笑い、その男の背中をどんとたたいた。

兵士は深々と一口吸って、大きな青い煙の輪をすーとすぐに吹き出し、それから自分の意見を述べた。「あの辺はおれが住むにぁ性が合わん。“バクチ”も出来んし、阿片も無え。それにぶらぶらもしておれん。くそ面白くもねえ仕事をして、暇ん時にあ学習をやらされるし……。だろう、おれが喜んで住めるかってんだ。金輪際、住めっこないぜ。ほかにもいろんなことがあったがな、おれは気に入らんかったさ。あの辺の役人はえらく妙なんだ。……最初の日、ある男がわしら捕虜に演説をしたんだ。やって来たのが正になんとか主席に当

るんだそうだ。そのお偉方は足は草鞋ばきで演台に上がり、着てる服ときたら、短かくて右肩にぁ繕いの跡まであったんだ。そして、両袖を上の方まで高くまくり上げていたなあ。道で出逢ったら“おい！　わしに駕籠を担いでくれ！”と叫びたくなる恰好でさ。“かごかき”そっくりさ。……下にいた仲間にはこんなに言う者もいたぞ。“フー、主席さま、かごをかつぎますかね……”だが笑っちゃいかんぞ……。後で分かったんだが、この男の腹の中は一杯つまっていて、道理に叶ったことばっかし言うんだ。そんでも、あんな服装じぁどうも気に入らねえなあ。役人はやっぱし役人らしくしとかんとなあー」

「少しもいい点がなく、全部が気に入らんと、まさかそうじぁあるまいが！」眼の大きな男がせきこんで口をさし入れ、少し不平げな語気である。

「感心したなあ、おれは、この点だけぁ。ピカ一だなあ。」兵士は喫え煙草を口から外して、大きな指先を押し立てて、「ごろみたいな金持ちなんか一人もいねぇんだ。さっきの甲板のデブみたいな奴は、とっくに頭の骨を毀き割られてしまうさ。」

「いいじぁないか。それぁ。あの人たちのやる通りにすれぁ、銭っ子を持ってる奴はみな馬鹿みるぞ。船に一等・二等が分けられるか。できるもんか……わしらも居場所に苦労したり、船尾でさぁ雨・風の心配なんかすることもないぞ。」その男は大声で話し、張切り、興奮している。周囲に坐ったり、横になったりして、その便衣の兵士のすばらしい言葉を聴いていた者は、皆一斉に讃嘆の声を発した。「そうだ！」

船尾のステップからボーイが突然、跳び出て来た。銃を背負った山東男を連れていたが、灰色の軍服を着ている兵士を指さして言った。「こいつです！」

山東男が命令して言った。「行け！　英国人が呼んどる、お前を。」

兵士は驚き慌てたが、仕方なく後に跟いて行った。

人の群れが彼の後にぞろぞろくっついて行った。

甲板に横になっていた難民のような船客もざわざわし出し、黄色いすすけた顔をあげていぶかしげな眼をしている。

船は相変らず青い海の上を銀白色の波を切って、揺れながらも悠々と進んでいる。船上での人々の騒ぎは全く意に介しないかのように、ひたすら前進に前進をしている。無情な鋼鉄の前進……。

二等船室のとある部屋に着くと、曲ったパイプを喫えた西洋人の兵士が威張って腰掛けているのが見える。脂切ったデブが恭しくそこに立っていた。

洋兵は“牛角ひげ”の口許から左手でパイプをとり、兵士へ向かい形相変え

て怒鳴りつけた。

「支那人め、わしら英国人を馬鹿にするのか。できるか。どうだ！」と言いざますくっと立上がり、兵士に一発ビンタを喰らわせた。

兵士は昔、兵営内で中隊長から殴られた時と同じように、ただ頭をうつむかせ、手を垂らして立っているだけであった。

デブはまたもや“清三翻”で勝ち、その瞳は勝利に輝いていた。

洋兵は椅子に依然として腰掛け、威張って口許を曲げ、またパイプを喫えてゆっくりと吸った。灰色に青味を帯びた上眼使いに、目前の捕虜の顔色――いぢめられた恥ずかしさと怒りとが交錯した顔色――を鑑賞している。

デブは脂切りテカテカした顔に心から感謝しているような表情を無理に浮かべ、洋兵へ向かって手を拱ね、腰をかがめている。

洋兵は身動きもせずに、ただ口許を少しすぼめ、プーツと紫煙の輪を吹き出した。この煙は洋兵の一瞬の微妙な表情をすっかり隠してしまった。

兵士はパタパタと船尾へ帰りながら、二等船室の方を向いて大声で怒鳴った。

「貴様！ 洋鬼子、貴様！　金持ちめ！　わしは貴様を打殺して血達磨にしねえと、男が立たん――」

船尾からは遠く離れ、それに逆風だった。その兵士の怒号は二等船室に何の動きも引起こし得なかった。ただ二等船室の上の煙突が煙塵を吐いて船尾へばら播き、海へと散らしているだけであった。

1931年　冬

1982年3月于樟東書屋記

(昭和57年3月31日受理)